

2016 年度台湾研修 報告書

中国語 TLP（トライリンガルプログラム）

2017 年 3 月 29 日

1. 台湾研修日程

日付	活動内容
3月1日（水）	228 紀念館、国史館、慰安婦博物館、寧夏夜市
3月2日（木）	新北市淡水区へ。淡江大学訪問（村上春樹研究所、日本語学科他）。淡水の「文史工作」の団体と連携して観光ガイドに取り組む淡江大学の学生さんたちとサイクリングで老街（旧市街）などを回る。故宮博物館なども参観。
3月3日（金）	午前：国立台湾大学日本語学科・日本研究センター（校史館二階の右側）で講義を聴講。 午後：景美人権園區を訪問。国立政治大学台湾史研究所・薛化元教授の講義を受ける。
3月4日（土）	総統府、台北賓館。九份へ
3月5日（日）	8新竹市の清華大学へ。「北海道ダイアログ」のシンポジウムを聴講（日本、中国、台湾、韓国の学者、社会活動家などが発表）。夜：城隍廟
3月6日（月）	午前：新幹線で嘉義へ。嘉義公園、檜意森活村など。 午後：中正大学を訪問。
3月7日（火）	午前：国立成功大学歴史学科で陳文松先生の台湾・台南の歴史・文化に関する授業を聴講。学生さんと交流。 午後：台湾文学館、赤崁楼、安平古堡など。
3月8日（水）	日本に帰国

2. 学生のレポート

3月2日（木）

#1 淡江大学訪問（村上春樹研究所、日本語学科他）@淡江

河野 佐知子

淡水の「文史工作」の団体とサイクリングで老街観光

到着日から充実していたけれど、今日が本格的な活動初日。朝の集合は8時で起床後余裕があったので、大安森林公園まで散歩に行くことにした。台湾や中国には朝から公園で運動をしている人が多いと聞いていたので、実際のところを確かめようと思った。6時頃はそれほど暗くなかったが、公園ではイルミネーションが光っていた。確かに、公園の周りにはランナー、公園内には音楽をかけてなにやら体操をしている朝からアクティブな方がたくさんいた。公園からの帰り道では、すでに朝ごはんの屋台が開き始めていた。屋台で朝ごはんを買うのは台湾では日常的なことらしい。余談だが、帰りに1本道を間違えて迷子になりかけて、WiFiのありがたみを実感した。台湾の道は碁盤の目のようになっており、なかなか紛らわしいので要注意である。

最初の訪問地、淡水へは MRT を使った。通勤の時間帯だったため、混雑で皆が同じ電車に乗れなかったが、日本の激混み通勤電車を経験している者からするとまだまだいけると思った。淡水駅からはバスに乗り換え、淡江大学を訪問した。この大学の日本語文学科には、世界で唯一の村上春樹研究センターがある。研究室自体は2011年に開室し、研究成果により同センターを2014年に開いたという。センターの教授がおっしゃっていたが、現役の作家の作品を研究することは珍しいと感じた。案内して頂いた応接室には、日本語を始めとした様々な言語の村上春樹関連本がたくさん置いてあった。それでも図書室にはもっと多くの本があると伺い、村上春樹の海外での人気を改めて知った。私は一時期村上春樹にはまり、読み漁っていたが、また彼の作品を手に取り、その人気の理由を探りたいと感じた。ちなみに、教授のおすすめの一冊は『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』。長すぎず読みやすいとのこと、まだ読んでいない人は試してみてはどうだろうか？私も再読して新たな発見をしたいと思う。





昼からは、台湾の学生さん 3 人とレンタサイクルで淡水の街を観光した。まずは、スペイン統治時代に築かれた紅毛城へ。お城の隣にはかつてのイギリス領事館もある。紅毛城はスペイン人が建てた後、オランダやイギリス、日本などへ所有者が変わり、現在は台湾政府所有となっているそうだ。緑が多い敷地の中に、ヨーロッパを思わせるレンガ造りの建物が並び、良い景色であった。また、最近では、韓国

ドラマの影響で韓国人の間では人気の観光地らしい。

昼食は、台湾の学生さん達おすすめの小籠包のお店に連れて行ってもらった。小籠包を始め、中華麺や春雨のスープなど、各々好きなメニューを頂いた。1 品数百円で食べられてしまうから、本当に台湾の食事は安い。しかも、美味しい。

腹ごしらえをした後は、本格的なサイクリング。というより、私達女子 2 人にとってはもはや自転車強化合宿。情人橋などの観光地を巡りつつ、海沿いのサイクリングロードを走った。向かい風に苦しみつつ、遙か先を走っていく男子を追ってひたすらペダルを漕いだ。さぞかしいい汗をかいただろうと思うかもしれないが、むしろ淡水は寒かった。台湾が沖縄くらい暖かいと勘違いして薄着していた上に、その日はかなり寒い日だったようだ。また、学生さんによると、淡水は台湾の中でも最も寒い地域だという。こんな感じでけっこう大変な思いをしたが、ゴールした時の喜びもひとしおで、みんなと良い集合写真も撮れた。(真っ直ぐに海岸沿いを走ったということは同じ距離戻らなくてはならなかったことはご想像の通り……。) 何はともあれ、16 時過ぎに自転車を返却し、そこからは自由行動した。



女子 2 人は淡水老街をぶらりと歩くことにした。夕方だったためか、メイン通りは小学生くらいの子供や観光客で賑わっていた。台湾らしい屋台が多く、小さい雑貨を売る店や食べ歩きしている人が多かった。特に、海に近いだけあって、巨大なイカフライなど、シーフードが目立った。私達は非常に疲れていたのもので、その後すぐホテルに戻ることにしたが、淡水はきれいな夕日で有名ならしいので、行く機会があればぜひ見てほしい。

3月3日（金）

#2 国立台湾大学日本語学科・日本研究センター@台北

増田 茜

台湾研修三日目、前日のサイクリングによる疲労感を抱えつつも私たちは東大駒場キャンパスの銀杏並木よりはるかに巨大な台湾大学のヤシ並木を通して日本語学科・日本研究センターへ向かいました。



↑キャンパスの入り口から続く南国風の広く長い大王椰子並木

センターでは徐興慶先生による講義を聴講しました。講義では台湾の歴史やそこに関わっ

た日本人の話、そして日本と台湾の文化の違いなどを学びました。日本統治時代(1895-1945)、戦後(1945-1987)、民主化の進んだ現代(1987-)という大まかな流れに沿って台湾の歴史を見ていくとそこに出てくる日本の姿に、自分の生まれ育った国でありながら知らないことが多いと感じました。台湾研修の熱が冷めないうちに講義で紹介していただいた『セデック・バレ』や『KANO 1931 海の向こうの甲子園』と言った映画作品に目を通したいと思います。

講義の後は大学内にある学食で昼食をとりました。学食はフードコートのように複数の飲食店が集まっていて様々なジャンルの食べ物から自分の好きなものを選べるようになっていました。しかし研修三日目にしてもはや読めない繁体字のメニューを解読して注文することから逃げた私は注文制のお店ではなく、重量で値段が決まるバイキングスタイルのお店でお昼にしました。持ち前の(?)計画性のなさゆえに鶏肉ばかり何種類もとってしまったがどれも美味しかったです。あとポテトサラダにチョコバナナによく振りかけてあるやつ(正式名称はカラスプレーというらしい)がかかっていた気がするのは台湾の食事に早くも胃を破壊された私の生み出した幻覚だったのかどうか未だに悩んでいます。



↑学食を出てすぐのところにあった一年女子の寮、Freshman Woman Dormitory というなかなかややこしい表記がされています。

3月3日(金)

#3 景美人権園区@台北

橋本 淳平

三日目の午後、台湾大学を去った私たちは薛先生に連れられて景美人権園区を訪れた。台湾大学周辺の閑静な街並みを離れ、いかにも下町といった通りをしばらく歩くと、左手にひ

ときわ高い壁が見えた。コンクリートの分厚そうなその壁の上には鉄格子が取り付けられており、何者の侵入をも許さないという強い意志が感じられた。刑務所でもあるのだろうと早合点した私は、目的地である景美人権園区がまさにその建物だと気付いた時は驚いたものだ。入ってみて気づいたが、刑務所のような作りになっているのは広い敷地のおよそ半分くらいで、後の半分はいたって普通の、大学のキャンパスといった風に開放的な作りになっている。その右側、開放的なほうにある建物の一室で、私たちはまず薛先生の講義を受けた。

講義の内容は台湾の民主化の歴史的再評価についてであった。要約すると、蒋介石の弾圧の時代から蔣経国の民主化の時代へ変わった、という一般論には再考の余地があるというものである。その理由としては、確かに蔣経国は戒厳令を解除したが、憲法に反する法令が多く残り憲政の実現には程遠く、また国家総動員法による人権侵害も残存するなど、民主化への移行が決して円滑ではなかったからだと思う。思うというのは、自分の聞き取ったことに自信がないからだ。ひとえに自分の中国語力不足による。薛先生は聞き取りやすい大きな声で、ゆっくりと、時にはジェスチャーも交えながら話してくださった。しかし、如何せん知らない単語が多すぎた。授業で習う北京語との発音の違いもあって、リスニングのテストであれば赤点を取るような状態だった。なんとか話についていくことができたのは、同行していた比屋根さんの通訳のおかげだ。

その後、陳中統さんの案内で人権園区を回ることになった。陳さんは白色テロの被害者であり、1969～1979年の10年間投獄されていたそうだ。岡山大学で医学を学び、今年で80歳になるが今でも現役の医師だ。

最初に訪れたのは復元された裁判所。イメージよりもずっと小さなその空間では、形ばかりの裁判で多くの人が断罪されたそうだ。陳さんもその一人だ。

次に回ったのは、白色テロで投獄された人たちの名前が刻まれた記念碑だ。黒い石にずらりと並ぶ名前たちは、人権弾圧の大きさを物語っていた。陳さんによれば、特に死刑が多かった弾圧初期の人々は名前すら把握できていないという。横には投獄されていた期間が記してあるが、ところどころ赤字で記されているものがある。聞くと、この記念碑を作った時点で亡くなっていた人のところは赤くしてあるのだとか。死因は、寿命、自殺、病気、銃殺などさまざまだそうだ。

最後に、かつての刑務所をみて回った。そう、私が最初に目にしたのは紛れもなく刑務所だったのだ。そこで興味深かったのは、同じ受役者でも仕事のあるものとなないものでは食事や部屋などの待遇に差があることだ。洗濯や建設などの仕事があるものには、少ないながらも給料も出た。反対に、仕事のないものは1日に15分しか部屋から出られないと聞いてぞっとした。独房の扉に自殺防止用のウレタンがついているなど、生々しい絶望を伝えてくる痕跡もある一方で、案内する陳さんの表情は不思議と明るかったように思う。日本で医師免許を取得していた陳さんは投獄中も医務の仕事をしていた。後で聞いた話では看守の妻を診ることもあったようで、仕事のある受役者の中でもかなり優遇されていたのだろう。タバコ

を吸うことや酒を飲むことも許され、妻との面会時間を延長してもらえたそうだ。何より、人に必要とされるという仕事のやりがい獄中の生活に少なくない充実感を与えていたのだろう、というのは筆者の邪推だろうか。

園内を一通り回った後、元の建物に戻った私たちは陳さんの話を聞いた。上に書いた陳さんの経歴は、この時聞いたものだ。話がひとしきり終わると、質問の時間が与えられた。印象に残ったのは、牢の中で何を考えていましたか、という質問への陳さんの答えだ。一つ目は、国民党の転覆を願っていた。二つ目は、家族の無事を願っていた。そしてどちらに対しても無力感を覚えていた、と。白色テロという悲惨な歴史を形作っているのが、自分と同じ普通の人間であることが強く実感された。

政治的アイデンティティのために投獄の危険を覚悟で行動を起こした陳さんに、獄中での活動をやめさせたのは何か。間近にある死の恐怖か、家族への思慕か。筆者にはそこまで聞く勇気はなかった。

恥ずかしながら筆者は、台湾の歴史について極めて皮相な知識しか持っていなかった。というより、今もそうである。しかし、今回の研修で同じ人間の直面した出来事として歴史を身近に感じる事ができたのは、これから社会と関わる上で大きな経験となるだろう。

3月4日（日）

#4 総統府、台北賓館@台北

小森 優真

台湾研修四日目。この日も晴天で更に温暖でした。その前までは比較的寒かったので心地よく感じられる陽気でした。

まずは台大医院駅から歩いてすぐのところにある総統府へ。周りには銃を持った憲兵が立っていて物々しい雰囲気でした。まだ開館三十分前だというのに長い行列が。その時は知らなかったのですが、月に一回だけ自由に見学できるため、その参観日に人が殺到するようです。開館時間を過ぎてもなかなか列が進まず、何をしているのかと思ったらセキュリティチェックを行っていました。身分証としてパスポートの提示を要求され、刃物などの凶器になりうるものは一時没収され、カバンを開けて中身を調べられ、更にペットボトルの中身を飲んで見せてちゃんと飲み物であることを示させられました。こうした厳重なセキュリティチェックを抜けていざ中へ。ちなみに総統府の入り口から正面の道路を見ると、遠くに台北 101 が見えました。



エントランスは 15m ほどの高い吹き抜けの豪華な内装。エントランスにいらっしゃったガイドの方曰く、こちらの建物は 1912 年着工、1919 年竣工の、日本統治時代に建てられた建物だそうです。当時の名前は総督府でした。デザインは公募されていましたが、長野宇平治さんという方の案が採用されました。東京駅のデザインをした辰野金吾さんの弟子で、日本では多くの銀行のデザインを手がけています。西洋の建物を意識してバロック式のデザインを取り入れたそうです。また、材料は台湾の石灰が使われており、外壁の煉瓦は日本製、鉄骨は海外のレールが使われているそうです。高さ 60m、幅 140m、奥行き 65m と当時台湾で一番大きな建物でした。そして、上から見ると「日」の字に見える作りとなっていました。

更に進んで行って一階に降りると、総統府や台湾の歴史にまつわる様々な展示物が並んでいました。そこまでは総統府の中の作りを見ることがメインの見せ方となっていたのですが、後半は展示物を見ることがメインとなっていました。どうやら蔡英文総統になって以降、総統府の見学内容が充実してきたそうです。



続いて近くにある台北賓館へ。こちらは元々総督の公邸かつ官邸かつ迎賓館でしたが、今は迎賓館としてのみ使われています。ただ公邸としては使い勝手が悪かったのか、庭に日本家屋を建ててそこに住むようになったそうです。西洋風の建物と日本家屋と亜熱帯の植物の植わった日本庭園のミスマッチ感は面白かったです。こちらは見学時にちょうど

ガイドツアーを行っていたのですが、人が多くガイドさんの声がほとんど聞こえませんでした……。

どちらの建物も日本統治時代に建てられたものであり、使用用途もほとんど変わらずに現在までずっと使われ続けているものです。更に総統府は太平洋戦争で空襲の被害に遭ったにもかかわらず、改修して使われ続けています。ここからも台湾と日本の関係性がうかがえます。また、この二つの建物は日本人が建てたにもかかわらず西洋の様式をふんだんに取り入れた建物となっています。当時の日本人の西洋に対する憧れや近代化の意識もうかがえる非常に興味深い建物でした。

台北賓館を出たのち別の学生さん三人と合流し、台湾大学医学部の食堂で昼食……と思ったら閉まっていたため、病院の地下のフードコートで食べることに。病院のなかとは思えないほどの綺麗さと充実ぶりでした。僕は炒飯を食べました。ちなみにこのとき日本のフードコートでもよく使われている呼び出し用の機械を渡されて少し感動しました。



3月4日（日）

#5 野柳地質公園、十份、九份

高坂 州

帰国したその日の夜にこの文を書いている(いた)。死ぬほど眠い。ねむい。台湾は楽しかった。また行きたい。(3/15 追記：疲れすぎて一部意味不明な文になっていたのを直しました)

午前中に総督府と台北賓館を見学し、案内してくれる学生さんたちと会って台湾大学医学部の地下でお昼を食べたあと、僕らはマイクロバスに乗って台北から台湾北東部に向かった。路面が悪く揺れが激しかったが疲れていたので爆睡してしまった。

1時間ほどするとバスは野柳地質公園というところに着いた。看板を見るとジオパークらしい。日本の伊豆、秋吉台、中国福建の泰寧のジオパークとは姉妹公園とのことだ。この野柳地質公園は長さ 1.7km ほどの小さな半島で、一番細い場所は幅が 50m ちょっとしかない。この場所で注目に値するのはなんといっても風化によって生まれた数々の奇岩だろう。比較的滑らかな土台の岩の上には穴だらけで濃い色の岩が乗っていて、本当に奇妙な光景だった。半島の中ほどに有るのは有名な「女王頭」である。これは見る角度によって本当に「女王の頭」のように見えるというキノコ岩で、行った時も大勢の観光客が列を作って記念撮影していた。僕らはといえぱ列に並ぶのが面倒だったので岩の反対側に回って写真を撮ってきた。



「女王頭」

その後半島の付け根の方にある「燭台岩」を見に行った。これは言葉で説明するのが難しい形をしているが、言われてみれば確かにロウソクである。



「燭台岩」

これらの岩の誕生について補足すると、野柳の地層は主に砂岩で構成されているが、一部生物の死骸由来の炭酸カルシウムを含み周囲より固くなっている場所があり、それによって侵食に違いが生まれて複雑な岩の形ができる、ということらしい。

集合時間になってまたバスに乗って今度は九份に行くのかと思っていたら十份に着いた。十份に近づくとすぐ空に風船が舞っているのが見えた。ここ十份は風船に願いを書いて飛ばすのが有名だ。良いなあと思っていたら川に落ちている大量の風船を見て真顔になる。気を取り直しバスから降りて、僕らも願いを風船に託して飛ばすことにする。『単位』『精進』『強い胃』『ロッテ日本一』これが僕らの願いだ。どうしても単位が欲しかったので学業の願いを叶えてくれる紫色の風船にみんなで自分の願いを書いていった。



願いを乗せて

書いている途中汽笛が聞こえてくる。なんとこの場所は現役稼働中の鉄道の線路の上に有ったのだ。避難すると目と鼻の先を列車が走っていった。



通り過ぎる列車

2回ほど列車を見送った頃、僕らの風船が完成した。単位を、風船に託して、飛ばす。風船が浮かび上がった。僕らの手を離れ、高い高い空へ…。いつしか風船は傾き始め、そして落ちていった。単位が落ちていった。回収班が走って向かう。なんと回収に成功したようだ。



回収成功

僕らの単位はこうして救われた。あとは成績発表を待つだけである(現在発表当日0時半)。
(3/9 追記：単位はちゃんと取れました)

かくして無事単位を回収した後、僕らはまたバスに乗り、今度こそ九份に向かった。到着すると、ちょうど日の入りの頃だった。やや標高が高いのか若干寒い。案内されるがまま曲がりくねった道を進むと、全家便利店を発見した。本当に無處不在である。店が並ぶ通りに入ってすぐに、案内役の女子大生に「この店、美味しいよ」と言われる。二つ返事で決定。流石、その魚丸湯は很好吃(ハットー)であった。



夕飯

その店を出てからというもの、僕はノンストップで食べ歩きを続けていった。豆の粉で包んだアイス、草餅、肉まん、豆かき氷的なものなどを食べた。この頃にはもう日はすっかり沈み、提灯に灯りがともり、すっかり千と千尋の世界になっていた。食べ歩きながら階段の上の方に行くと、「もうこれ以上見るところないよ」とのこと。九份は思ったほど広くなかった。仕方がないので、九份で1番有名なあの景色が見える場所に向かう。上の方に展望台でもあるのかと思っていたら階段の途中の広場から見える景色らしい。なるほど行ってみると写真の通りだ。良きかな。



良い。

写真を撮り、まだ時間が有ったので歩き回っていると店がどんどん閉まっていく。8時を過ぎるともうそんな感じなので驚いた。最後帰るところになると店はみんな閉まって、街はすっかり観光地から静かな住宅地へと変わっていた。日の入りから1時間半ほどの短い間の風景。九份に行くときは、ぜひ逃さずその目に焼き付けてほしい。

3月5日（月）

#6 国立清華大学@新竹

鈴木 隆斗

シンポジウム「北海道ダイアログ」

台北での滞在を終え、台湾南部へとむかった。朝8時に貸切バスに乗り、新竹市へ移動した。乗車時間は一時間強。前日までの疲れか、多くの人が車内で静かだった。丁度いい睡眠時間と思ったのは私だけだろうか。そんな休息も束の間、その後の予定は詰まっていた。

新竹市に到着後、ホテルでスーツケースを置いたらすぐに新竹市の清華大学へ向かった。「北海道ダイアログ」のシンポジウムを聴講するためである。このシンポジウムは東アジアにおける問題を扱っており、日本、中国、台湾、韓国の研究者や社会活動家が参加している。私たちは9時半から12時まで聴講した。発表者は二人で、一人は映諾社区発展機構の李鎬氏、もう一人はNPO 法人ライフリンクの清水康之氏だった。前者のテーマは中国における労働者のマネージメント、後者は日本での自殺対策だった。

どのような発表だったか簡単に内容を説明しておこう。まず、労働者マネージメントについて。中国において労働者の関心は、金銭の問題から職場環境などへと移りつつある。また労働者の高学歴化・法律に対する理解もすすみ、労働交渉も高度になってきている。しかし、労働者が依然として弱者であることに変わりはなく支援する必要がある。労働者の要求を満たせるようなシステム作りが肝要である。

日本の自殺対策については。日本における自殺数は近年減少している。1つの要因として、法整備と世間での自殺に対する意識変化が考えられる。清水氏曰く、自殺対策は能動的に達成された。一般に対策は、社会問題が世間に注目されてから行われる。しかし今回の場合は

逆で、法整備から始めて世間での意識改革を促したと言う。以前なら個人の選択された自殺を社会の問題だと捉え、法律を作ることから始めたのである。それがマスメディア等を通じて世間で広く問題視されるようになった。結果、自殺が減少した。能動的に問題を提起し、中身を伴った対策を自ら提示することが大切だと説いていた。



両発表ともに重大な社会問題であり大変興味深かった。このような議題が国内だけでなく、東アジアで集まって議論されているというのもどの国でも関心度が高い現れだと思った。

このように内容的に充実した聴講だったが、語学的にもおおいに刺激を受けた。発表は日本語あるいは中国語だったが、同時通訳が付いたので中国語のリスニングになった。未習の中国語単語が出てきても、日本語の助けを借りて類推するという強者もいた。さらには司会者や参加者が中国語と日本語を両方とも流暢に話しており、感銘を受けた。

内容的にも語学的にも噛み応えのあるシンポジウムであった。非常に有意義な時間を過ごせたと思う。



3月5日（月）

#7 北舗@新竹

安藤 実大

シンポジウムの後、お昼は、案内役の比屋根さんと一緒に新竹の客家料理をいただきました。少し味付けが濃く油っぽいメニューが多い一般的な台湾料理と違って、客家料理はさっぱりとした魚料理が多かったのが印象的でした。

その後、バスで古都の北浦に移動し、北浦のお茶づくりを体験しました。日本のお茶のように茶碗ごとに茶筌で立てるものを想像していたのですが、初めに手渡されたのは、意外にも直径40センチメートルほどのすり鉢と、長さ50センチメートルほどの棒でした。これで黒ごまとピーナッツを粉々になるまですりつぶすということでしたが、これがなかなかの重労働で、皆で交代しながら10分ほどすり続けました。その後粉末状の茶葉を加えて混ぜ、各自の茶碗に分けてお湯を注いだら完成。それに加えて客家の大きなお餅もいただいたので、かなりお腹が膨れました。



美味しいお茶でお腹一杯になり、バスの中でうとうとしながら新竹のホテルに到着。荷物を置き、徒歩数分の城隍廟に行きました。なにやら硬いものが落ちた音があるので行ってみると、参拝者の方が三日月の形をした赤い木片を落としていました。比屋根さんの説明によると、二つの木片を落として一つが表一つが裏なら神様のイエスのサインで、おみくじを引いてもいいとのこと。3回まではやり直して良いのですが、小林は見事3回連続両方表を叩き出していました。

お寺を囲むようにして数多くの屋台が立ち並んでおり、私は肉団子のスープとロウユエンを注文しました。間違ってロウユエンを6つも頼んでしまいなかなか食べるのが辛かったですが..

その屋台で小林と橋本はなんとカエルを食べて帰ってきました。その夜小林はひどくお腹を壊すことになるのですが、先のお寺での不運がそれを暗示していたのかどうかは、神のみぞ知る..



3月6日(火)

#8 嘉義市内@嘉義

村上 泰仁

嘉義市は台湾南西部にあり、北回帰線が通っているためにちょうど亜熱帯と熱帯の気候が見られる。今回、私たちは成功大学黒羽先生の案内のもと、嘉義市の歴史を感じら



れる場所を巡った。

1) 嘉義公園

まず初めに向かったのは嘉義公園。嘉義公園は嘉義市の東にあり、広さは約 26.8 万㎡ある。(東京ドームの敷地面積がおよそ 4.7 万㎡なので、およそ 5~6 個分に相当) この公園は 1906 年の大地震で嘉義が大きな被害を受けたのちに作られ、入口には孫文の銅像がある。右は嘉義公園入口の写真である。公園内にはさらに、油絵画家の陳澄波(1895-1947)による油絵が至る所に見られた。陳澄波は東京美術学校へ留学し、日本でも学んだ画家であるが、二二八事件で公開銃殺されてしまった。

(i) 嘉義孔廟

嘉義公園内を進んでいくと、孔子をまつる嘉義孔廟が見られた。右は嘉義孔廟の写真である。嘉義孔廟は再建されたもので、もともとは別の場所にあったが、日本の台湾統治時代に大地震で倒壊してしまい、そこに日本が病院(現在の嘉義醫院)を建ててしまったために嘉義公園へ移された。



(ii) 嘉義市史蹟資料館

嘉義孔廟の次に向かった先は嘉義市史蹟資料館である。資料館はもともと嘉義神社付属の斎館と社務所で、1943年に創建された。残念ながら当日は休館日だったようで、中には入れなかったものの、日本の建築様式が使われている様子が右写真よりうかがわれる。



(iii) 射日塔

嘉義市史蹟資料館から東に行くと、一帯で一番の高台に射日塔と呼ばれる塔があった。射日塔は高さ 62m の 12 階建てで、右写真のように見晴らしが大変よく、嘉義市全体を一望することができる。日本の台湾統治時代、この場所には嘉義神社の本殿があり、終戦後に抗日戦争などで亡くなった人たちを祭る忠烈祠となったが、1994年に焼失してしまい、1998年に一階部分を忠烈祠として射日塔が建設された。射日という名前は台湾原住民の伝説「太陽征伐」に由来しており、また、「日本を討つ」とも解釈され反日意識が垣間見られる。



(iv) 嘉義市立球場

射日塔から公園入り口へ戻る帰り道に、嘉義市立球場があった。1931年に、嘉義農林学校が甲子園に出場して準優勝し、その後も甲子園に出場した。1997年にこの球場前にその記念碑が建てられている。また、この甲子園出場を題材とした映画「KANO」が台湾で大人気となった。



2) 嘉義市二二八記念碑

嘉義公園を出て次に向かったのが嘉義市二二八記念碑である。1989年に建設され、台湾で最初に建設された二二八事件の記念碑である。戒厳令が解除されてすぐに建てられたため、当時の人々はもとの政治体制に戻ってしまうことを恐れて町はずれの道路の真ん中にひっそりと建てたそうだ。

参考

- (1) 黒羽夏彦先生のお話といただいたプリントを大変参考にさせていただきました。
- (2) 嘉義市のサイト:http://www.chiayi.gov.tw/2015web/01_memory/list.aspx
史蹟資料館 嘉義公園 射日塔 陳澄波 二二八記念碑の紹介を参照しました。
- (3) 嘉義孔廟については http://confucius.culture.tw/temple/temple08_2.htm を参照しました。

3月6日(月)

#9 檜意森活村@嘉義

山下 雅紀

嘉義公園・228 記念碑・嘉義大学を経て、我々は昼食に向かった。“下水湯”なる壮絶なネーミングの—しかし至って普通の—スープとともに鶏肉丼に舌鼓を打った後に、一路北門(Beimen)へ。ここには阿里山森林鉄路の起点駅として北門車站が1911年に設けられ、以来木材運搬の集積地の一つとして役目を果たしてきた。その木造駅舎は地震などで相次いで損壊したものの修復され、開業当初の面影を残している。そのような中で、嘉義の新しい観光名所として2012年に整備された施設が「檜意森活村」である。



北門車站

名前の通り、阿里山周辺に自生する台湾ヒノキを随所に活用した施設となっている。工場や宿舍、製材場などの多くの林業史跡の面影を残しており、「保存+リノベーション」という近年流行りのスタイル¹を採っているようだ。

¹ リノベーションは既存の建物を修復し新たな用途に転じて利用することを指す。他のリノベーションの例として、台北市の松山文創園區や華山1914文創園區が挙げられる。



正面と案内パネル 濃茶と薄緑を基調とする落ち着いたデザイン

区内にある 30 を超える店舗や施設は、■文創市集、■在地有禮、■生活創藝、■時光特區、■好飲好食、■藝文展覽の 6 つに分類されている。厳密にエリアで分けられているわけではなく、場所によっては混在している。正面に比較的近い西側の区画には「在地有禮」が集められており、以下の写真に示すように多種多様なテナントが入居している。



貴妃醉鶏など珍味を売りにする店から煮卵の専門店まで揃う在地有禮

この区画を一通り回ってみて一つ感じた（また何人かで意見が一致した）ことは、総じて設定価格が高いことである。土産の性格を加味しても我々庶民には安くはなく、ある意味で高級志向な店が集まったのかもしれない。写真に登場した佳味鮮が嘉義に本拠を置く企業であることから推察するに、地場産業の促進や産業振興の一環でこうした店舗を採用していることも伺える。このような形式は日本では東京スカイツリー®内の「産業観光プラザ すみだまち処²」などを通じるものがあり、地元の中小企業を「保存」する機能も兼ねていると感じられた。

² ソラマチ 5F に所在。墨田区内の中小企業が取り組む商品開発などに区が優良企業として認定する制度を採っており、認証された製品はこのプラザに出店することができる。

加えて、園区内の随所に天然素材が生かされているのが印象に残った。右の写真のように休憩所は竹とヒノキを組み合わせで作られている。木造建築のトイレは周囲の景観に調和しどこか安らぎを感じさせる。以上のように人工さを感じさせるものを極力排除する意識は、来場者に落ち着きを与える点で成功しているといえる。実際に歩いてみると、彩色の抑えられた有機的な町並みは一昔前の日本を思い起こさせる。蔵造りで知られる川越にも似ているような気もした。



園内案内に関して言えば、店舗一つ一つにナンバリングが振られよく整備されていると感じた。一方で課題もみえてきた。繁体字、英語、日本語と3言語に対応しようとする姿勢が伝わる看板だが、どう見ても日本語表記が不自然だ。落ち着いて散歩を進めつつ、案内を見ようと看板に目を向けるとこれが待ち構えていると思うと心臓に悪い。日本人向けのサービスを中心に改善が必要で

はないだろうか。

課題の2つ目はPR力の不足である。日本人観光客のメインの滞在地である台北あるいは高雄から離れているとは言え、KANOの要素を取り入れるなど、工夫の余地があるに違いない。

とはいえ、台湾の林業史をはじめ多くのことを私たちに肌で体験する機会を与えてくれたこの度の訪問は非常に意義があった。もっと時間があればと惜しみつつここ檜意森活村をあとにした。

参考：<http://www.taipeinavi.com/play/475/>

3月6日（月）

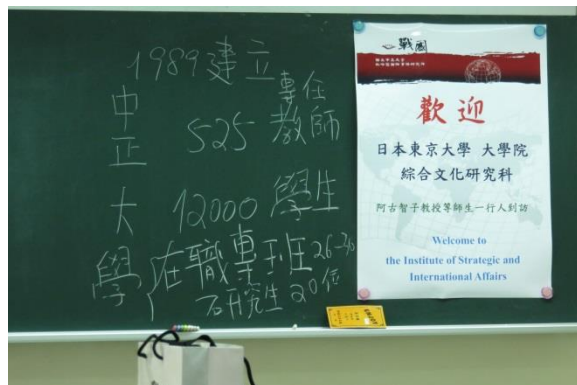
#10 国立中正大学@嘉義

島 健太

この日は嘉義大学や嘉義公園、檜意森活村をまわる比較的なんびりした日程だった。15時すぎ、村を出てバスで国立中正大学まで移動する。今回の研修で訪問したどの大学にも共通していることだが、キャンパス内は広く、緑が目立っていた。特に中正大学は郊外にあるのでその印象が強い。まず、蔡育岱先生の案内で戦略及国際事務研究所 (Institute of Strategic

and International Affairs) を訪問した。ここは 2000 年に設立された研究所で、グローバル化の進む世界の中で国防、戦略、外交（特に兩岸関係）、安全保障などについて研究、人材育成を行う場である（cf. <http://isia.ccu.edu.tw/>）。

ロビーには私たちを歓迎する張り紙があり、なんだか不思議な気分だった。普段駒場でなにげなく見ていた、海外の大学人の講演会や交流会を告知する似たような張り紙・看板が実



際にはどういうものなのか実感できたからである。当事者、しかも歓迎される側として。以前中国人民大学の学生との交流会に出席したが、彼らも私たちと同じように何らかの研修の一環として来ていたのだなあと、当たり前のことを納得したのである。研究所では、所の概要を林泰和所長に中国語で説明していただき、所の方々の楽しそうな写真もたくさん見せてい

ただいた。先生はゆっくり話してくださったが、わからない部分も多々あり、さらなる勉強の必要を痛感した。研究所は「戦国」という略称をアピールしているようで、篆書体でこの二文字を刻んだ印章のようなロゴマークもある。とてもおしゃれで気に入った。説明を受けた後、研究所の学生たちと交流する予定だったが、多くが不在のため図書館見学に変更された。



図書館に行く途中、研究所の学生の一人と遭遇した。中年の男性で、なんと法曹だという



（いい加減な記憶によると）。学び続ける向学心にたいそう感銘をうけた。図書館はきれいで、新しい雰囲気が漂っていた。駒場図書館に似ていなくもない。最上階からの眺めはとても素晴らしかった。見渡す限りの田園風景の中に、この中正大学はあった。大きなグラウンドや体育館。ボウリング場もあるという。駒場の狭いキャンパスで日々を送る私には大変羨ましく思えた。

図書館見学の後はキャンパス内のレストランで食事をした。私と他の数人は先生方の近くの席に座ったため、学生たちとのお喋りには参加できなかったが、その代わりに法学部所属の李仁森先生とお話しすることができた。先生は北海道大学に在籍していたことがあり、大変流暢な日本語で気さくに話しかけてくださった。ときどき中国語を混ぜて私たちを試すような場面もあり、刺激的であった。しかし、まだ専門をもたない私たちは世間話程度しかできず、その点は少し残念である。



3月7日（火）

#11 国立成功大学歴史学科（陳文松先生による授業と交流会）@台南

森 隆太郎

最終日は移動日なので、実質的には台湾で過ごす最後の1日。朝はいつもより少し遅く集合し、皆で国立成功大学に向かった。広いキャンパスではところどころで卒業記念の写真撮影をされていて、普段通りではないような、賑やかな雰囲気だった。成功大学は日本統治時代の1931年、もともと軍の施設だったところをキャンパスに「台南高等工業学校」として開設された。台湾屈指の学生たちの集まる大学として発展してきたが、近頃は、台北ではなく台南に、しかもその郊外にあるという地理的な問題からか学生が集まりにくくなっているらしい。広場のようなところには昭和天皇が皇太子時代に植樹されたというガジュマルの木がどっしりと生えていた。自分の通うところではない大学に行くと、そこは何を目指す大学か、どんな人が集まるのか、どんな沿革をたどってきたのか、キャンパスのシンボルはどこなのか、など、その大学について毎度尋ねることになる。その度に、自分の通う大学のことが翻って思い出され、入学時の志が思い出され、そして少しずつ自分の大学へのアイデンティティが芽生えてくる気持ちがあった。

記念の写真を撮り少しキャンパスを案内していただいた後は、大学内の歴史博物館で、歴史学部の陳文松教授と台湾文学の研究者兼詩人として有名な林瑞明教授のお話を聞き、大学院生の方々ともお菓子片手に交流させていただいた。

林教授が、研究の全体像・ビジョンを頭の中で描けるようなすばらしい研究者がこの中から



出てきてくれたらいいと願っている、とおっしゃっていたのが印象に残った。今回の研修全体を通しいろいろな大学の教授の方々のお話を聞く中で、大学はまずもって学究的な機関であり、東京大学の学生は当然その先陣を切って進んでいくことが期待されている、ということを改めて感じた。研究者に魅力を感じる

ようになったことで、自分の進路について考える上での選択肢が大きく増えた気がする。

交流してくださった大学院生は専門もバックグラウンドも多様な方々だった。台湾・中国・韓国それぞれの出身の方、また中国の相続関係の法律を研究する方から台湾の民族史を調べる方まで。台湾の印象の話やちょうど開催中だった WBC の話、日本の漫画の話など、普通の友達とするような会話を黒羽先生の助けも借りながらすることができ、楽しかった。その人についてさらに聞き始められない自分の中国語の弱さが少し悔しかったけれど、宿題が残ったと捉えたい。一緒に行った学生の中には英語でコミュニケーションを取っている人もいて、賢いなと思ったのを覚えている。この午前中の交流はあっという間の時間だったが、Facebook や Line を交換した。ここから長い交流が始まり、またその輪も広がっていくのかもしれないと思うと、“Facebook で繋がった友達 “というものを白けた目でばかり見ているわけにはいかないなと感じる。



3月7日（火）

#12 安平古堡、赤崁楼、国立台湾文学館@台南

小林真也

＜安平古堡、赤崁楼＞

17 世紀前半に台湾に進出したオランダ東インド会社によってゼーランディア城（現在の安平古堡）やプロヴィンティア城（現在の赤崁楼）が築かれ、台湾統治の拠点となった。ゼーランディア城は台湾におけるオランダ勢力の中枢として、行政及び貿易を統括していた。オランダ人は台湾を統治する際、漢人に対して重税を課すなどの厳しい統治方式をとったことに加え、オランダ兵士による汚職も蔓延したため漢人の不満が爆発し、1652 年に農民反乱「郭懷一事件」が起こる。この事件はほどなくして鎮圧されたが、このような事件の再発を防止するため、オランダ人が有事の際の防衛拠点として建設したのがプロヴィンティア城である。1661 年に大陸を追われた鄭成功が、「反信復明」の拠点を求めて台湾を攻撃し、オランダ人を駆逐して台湾史上初めて漢人による政権を樹立した。プロヴィンティア城は東都承天府と改名され、安平古堡と改名され鄭氏政権 3 代にわたって支配者の居城となったゼーランディア城とともに、台湾統治の中心となった。台湾が清朝支配下に入って以降はこれらの建築物は徐々に廃れていき、中国式建築物が建てられていくことになる。我々は史跡内を自由行動し、台湾の歴史に思いを馳せつつ、実際に目で見て学習を深めた。

＜国立台湾文学館＞

1916 年、日本統治時代の台南州庁として建てられた西洋歴史建築様式の建物で、1997 年より修復作業が行われたのち 2003 年から「国立台湾文学館」として新しく誕生した。台湾文学の発展を記録し、早期の原住民及びオランダ、スペイン、明朝、清朝、日本、戦後等の外来政権統治の中で多様に成長してきた文学を保存し、展示することを目的としている。展示の中で特に目を引いたのは、もともと決まった表記法を持たなかった台湾語や客家語を、ローマ字を当てて表現した白話字（教会ローマ字）である。19 世紀にキリスト教長老派教会が布教のために作ったもので、これらの言語の正書法となり民間にも一部普及した。他にも日本語で書かれた小説など、時代の流れに翻弄され続けた文学者たちの苦労がうかがえた。

4. 学生のエッセイ

台湾と沖縄

河野 佐知子

台湾で1週間過ごす中で、どこか懐かしいような、親しみやすいような感じがした。おそらくそれは、そこかしこにある日本語の看板や日本で見慣れたチェーン店のためだけではない。台湾研修に参加する2週間ほど前、私は沖縄にいた。私は沖縄のゆったりとした雰囲気が好きで、個人的に何度か訪問している。実は、この沖縄と台湾の間には歴史的に深い関係があったのである。

① 歴史的背景

日清戦争の講和条約である下関条約が1895年に締結されてから、第二次世界大戦が終わる1945年まで台湾は日本に植民地支配されていた。同様に、沖縄も琉球王国として日本の統治下にあり、これらの2つの国の間には国境がなかったため、活発な交流が行われていたことが想像される。特に、台湾は、石垣島や西表島を含む八重山地方から地理的に沖縄本島よりも近く、八重山地方と台湾の間には移住者も多かったという。今回引率してもらった、沖縄出身の比屋根さんに聞いたところ、今でも石垣島などには台湾からの移住者が住んでいるそうで、台湾風のお祭りも地域に根付いていると教えて頂いた。

台湾と沖縄の交流といえば、千葉ロッテマリーンズは2016年から2年連続春の石垣島キャンプで台湾プロ野球のラミゴと交流試合を行っている。今や台北から石垣までは飛行機で40分程しかかからないこともあり、ラミゴの応援団やファンも多く訪れたようだ。また、石垣市は、試合後に花火大会やライブを実施するなど、積極的に台湾からの観光客誘致を図っていた。



② 建物の雰囲気

左は台湾・台南市内の赤崁樓、右は沖縄・那覇市内の首里城の様子である。鮮やかな赤を基調とした建物や門や屋根に龍などの彫刻が配置されているところが非常によく似ている。



その他の建物についても、台湾、沖縄ともに、コンクリート造りで背が低いものが比較的多い印象がある。どちらも強力な台風の影響に幾度もあってきたことを考えると、木造建築が広まらなかったのは当然かもしれない。

また、沖縄の守り神として知られ、民家の屋根やお城でよく見られるシーサーに似た獅子の守り神も台湾で発見した。右の写真を見てわかる通り、表情や模様、ポーズ、彫刻の素材、目的など瓜二つである。



③ 動植物

地理的に近く、同じ気候区分に属しているため、植物が似るのも当然のことなのだが、両者ともに街の街路樹はやはりヤシが多かった。森のように木が茂った場所ではガジュマル、海岸付近ではマングローブなど熱帯特有の木々が共通して見られた。また、台北は沖縄よりやや涼しく感じたが、より暖かい南部の嘉義や台南の公園ではハイビスカスを始め、赤やピンク色の花が多く、南国の雰囲気を味わった。

あまり動物には詳しくないけれど、沖縄では、南国らしい鮮やかな緑の鳥や少し大きめの鳥、尾が長めの鳥が目立った気がする。台湾でも似たような鳥を多く見かけた。鳥好きの友達が喜んで写真を撮っていたので、やはり普段都会では見ることができない種類のものが生息しているのだと思う。

④ 食べ物

沖縄といえば、てびちやソーキ、ミミガーなどの、本土では普段あまりお目にかからない、豚のありとあらゆる部位を使った料理で有名である。台湾も同様に、夜市などの屋台に行くと、必ず豚の腸を使ったスープやソーセージが売られており、台湾料理店に行くと豚足を煮たメニューや魯肉飯という豚丼が食べられる。

また、台湾のホテルの朝食で見つけた、腐乳という豆腐の発酵食品が沖縄の豆腐のようにそっくりであった。腐乳は、豆腐に麴をつけ、塩水中で発酵させたもので、お粥に入れたり、炒め物や煮物の調味料として使ったりするのが一般的らしい。ちなみに私は、何も知らずに塊を一口で食べ、そのしょっぱさに一瞬にして目が覚めた。一方の豆腐ようは、島豆腐を米麴、紅麴、泡盛で発酵させたもので、お酒のつまみとして爪楊枝などで少しずつ削って食べられる。私が食べた腐乳は白いものだったが、麴に紅麴を使ったものもあり、豆腐よりの起源だとも言われている。味はかなり似ているが、値段は腐乳の方がはるかに安い。(写真左が台湾で購入した腐乳、右が沖縄の居酒屋で食べた豆腐よう)



今まで深く考えたことはなかったが、歴史的背景や地理関係をふまえると、台湾と沖縄の文化に多くの共通点があることは至極当たり前のことである。研修に行く前は、現在の台湾と中国の関係にもっぱら注目していたのだが、それ以外にも興味深い比較対象があることがわかった。国立台湾大学日本語文学系が出版している本のシリーズには、台湾と沖縄に加え、長崎も研究対象にしているものがあつた。江戸時代や明治時代の交易状況を考えると、長崎にも共通点がありそうで、そういう視点もあつたかと気付かされた。

この報告書の最初に、私は沖縄のゆったりした雰囲気が好きだと言った。この研修を通して台湾も好きになったのだが、それは、台湾が沖縄と多くの共通点、同じような雰囲気を持つからなのかなと思った。

台湾の鳥

島 健太

僕は鳥が好きだ。特に写真を撮るのを好む。といっても、わざわざ山野へ出かけていって探し回るようなことは（まだ）していない。暇なときに近所やキャンパスをうろうろする程度である。今回の台湾研修でも、合間を縫って色々な鳥を見つけては写真を撮っていた。当然ながら日本とは異なる鳥が多く、大変面白いので是非とも共有したいと考えてエッセイ(?)の題材に決めた。

①麻雀（スズメ）



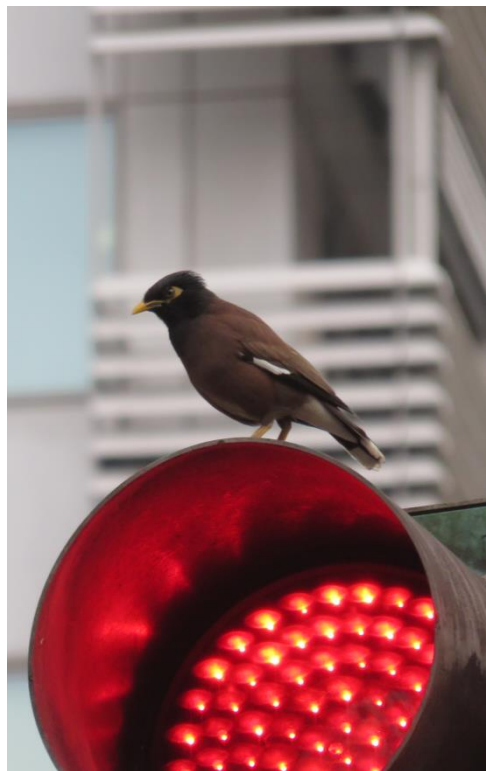
みんな大好き可愛いスズメ。日本にもわんさかいるし、台湾でもいたるところで見かけた。特に珍しくもなにもないが写真をとったので一応。写真は淡水で撮ったもの。

②喜鵲（カササギ）



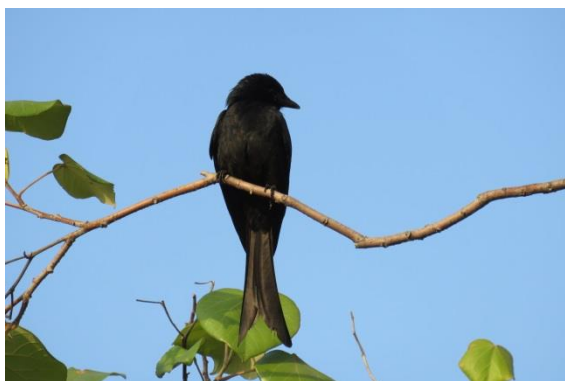
これもよく見かけた鳥。日本にはあまりいないが台湾では一般的らしい。大きさや歩き方はカラスとよく似ている。写真は台北（左）と淡水（右）。

③家八哥（インドハッカ）



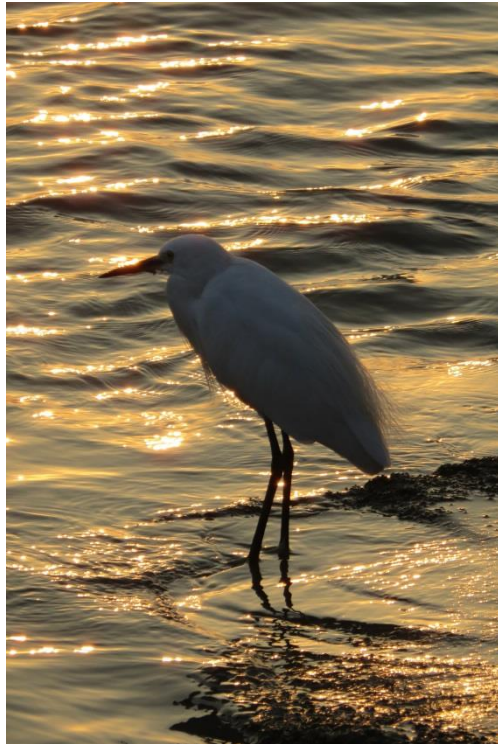
淡水で見つけたこの鳥には他の場所でも会った。大きさはムクドリと同じくらい。群れている。目元が黄色くてキュートだと思っていたら、和名が示す通りの外来種だと後に知って少しがっかりした。

④黒卷尾（オウチュウ）



真っ黒なスズメ科の鳥。大きさは 30cm ほど。長い尾が美しい。飛ぶ姿も美しかったが、飛ぶ鳥をきれいに撮る技術はまだない。

⑤小白鷺（コサギ）



足の指が黄色いのでチュウサギなどと区別できる。淡水で夕陽を待つ間にたくさん来たので撮影。首の伸びっぷりが面白い。

⑥夜鷺（ゴイサギ）



これも淡水で。歩き回ってエサをつついていた。右は幼鳥。

⑦蒼鷺（アオサギ）



淡水サギシリーズ最終鳥。デカイ。撮影当時はサギに疎すぎてコサギと一緒に考えていた。シルエットから大違いなのにな。

⑧黒冠麻鷺（ズグロミゾゴイ）



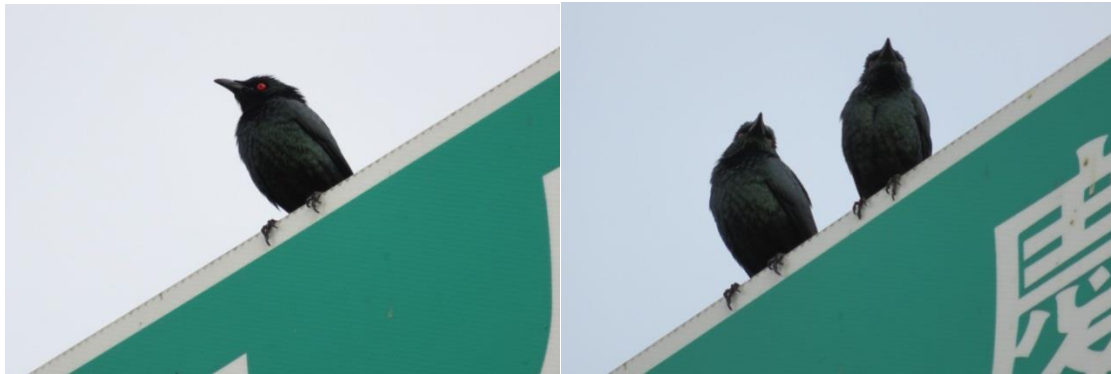
サギ科の大型の鳥。川辺というより林でよく見かけた。警戒心が薄いので容易に近づける。てくてく採食している姿には癒されたが、このおっとりした性格が災いして絶滅危惧種になってしまっているらしい。

⑨珠頸鳩（カノコバト）



キジバトかなと思っていたらこれだった。いたるところにいる。和名の通り首の鹿の子模様がチャームポイント。

⑩輝椋鳥（ミドリカラスモドキ）



赤い目が不気味なムクドリ科の鳥。よく見ると緑色の光沢がきれいである。それにしてもこの和名はひどい。総統府前の交差点で撮影。

⑪紅尾伯勞（アカモズ）



総統府で一度見つけただけ。写真だとわかりにくいですが、枝にとまったまま、群れ飛ぶ羽虫（写真左側）を捕食していた。

⑫五色鳥（和名なし）



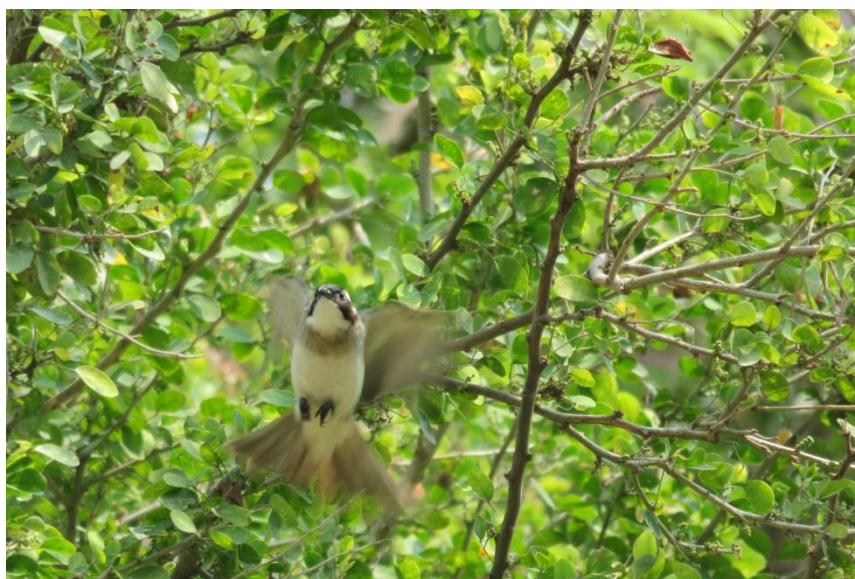
キツツキの仲間。「ゴシキドリ」という和名は *Megalaima oorti* (Black-browed barbet) を指す。この亜種とされていた *Megalaima oorti nuchalis* が「五色鳥」であるが、近年独立した種として大陸のものと区別され、*Megalaima nuchalis* (Taiwan barbet) となった。つまり台湾固有種ということになる。派手な色も美しいが、鳴き声も優美である（木魚に形容されることもある）。写真は台北の外交部領事事務局の前庭にて。

⑬黒天鵝（コクチョウ）



オーストラリア固有種なので当然野鳥ではない。台北賓館の池で飼われている。台北賓館のコクチョウ一家には「黒絲絨」（黒いベルベット）という愛称がついているらしい。

⑭白頭翁（シロガシラ）



ヒヨドリの仲間。警戒心が薄く、街中にもいる。翼の抹茶色が美しい。写真は外交部領事事務局前庭（左上）と嘉義公園。

以上が僕の見つけた（そしてともに写真が撮れた）鳥たちである。次回台湾に行くときは植物園や動物園も訪ねてみたい。

台湾犬事情

増田 茜

旅行で家を離れると、ホームシックとまではいかずとも家を思い出す瞬間がありますが、今回の研修では犬を見るたびに我が家で飼っている犬たちはどうしているか...と想像していました。台湾の街中にも日本と同じく犬がたくさんいましたがその暮らしぶりは全く別物でした。写真を撮らずに目で見て満足してしまう性格のため証拠写真がないのが残念ですが研修期間に見た台湾の犬について報告します。

・街中の犬達

台湾に到着して最初に見た犬は台北在住のシティー・ドッグたち。交通量も多く賑わった道を何とリード（首輪に付ける長い紐）無しで闊歩していました。洗練されたシティー・ドッグは交通規則も遵守するらしく赤信号ではきちんと歩道で待機し、信号が緑になってから横断歩道を渡っていました。（信号の色を見ているわけではなく車の流れが止まり人・犬が渡っても安全なタイミングがあると経験から学んでいるのでしょうか、いずれにせよ走る車にぶつかりに行かないのはありがたいですね。）また自由に歩き回っている野良犬なのかペット犬なのか、もはや犬種もわからない犬だけでなくお店の中や入り口でリードにつながれて寝ている犬もいました。こうした店番的な犬にはトイプードルやヨークシャテリアなど日本でもペットとして人気な犬種の犬も多かったです。その後、淡水や九份といった観光地でも多くの犬達はのびのびとリードに繋がれることなく自由に街中を移動していました。中でも印象に残っているのが中正大学で見かけた地面で転げ回っていた犬です。おもちゃか何かで遊んでいたのかそれとも地面でかゆい背中をかいていたのかは不明ですが、大学の構内で勝手に犬が生活しているのが驚きでした。

・犬の名は。

犬種の名前というのは日本語では外来語の発音のままカタカナ表記されるものが多いですが、台湾で漢字だけで表記することの限界を超えた画期的な意識に出会いました。



こちらはおみやげ屋さんで購入した萌犬出沒ステッカー（の裏の説明書き）。16種類の犬種名が記してあります。音を当て字で表現しているのが柯基（Kē jī コーギー）、拉布拉多（Lā bù lā duō ラブラドルレトリバー）、哈士奇（Hàshiqí ハスキー）などなど耳で聞いてもな

なんとなく推測できそうな犬達です。一方で私が面白いと思ったのは臘腸（Làcháng ダックスフンド）と、貴賓（Guībīn プードル）という訳です。まず臘腸は「ソーセージ」の意味だそうで、英語名でも同じく **sausage dog** という呼び方があるのだとか。ダックスフンドの長い胴をソーセージに見立てて生まれた呼称だと思われませんが、ソーセージで有名なドイツ原産の犬種ということで何か縁を感じますね…。次に貴賓という呼び方、これは2文字で的確にその犬種の特徴を表現した訳語だと思いました。プードルはフランス貴族に愛された犬であり、(小型化されたトイプードルはどちらかというと可愛らしさが特徴的ですが) 大きいスタンダードプードルの優雅で気品のある佇まいはまさしく貴賓という言葉にぴったりです。犬の呼び方ひとつにも、ふさわしい漢字を探した工夫が詰まっているのだなあと感心しました。

今回目にした犬は野外で暮らす犬がほとんどで室内犬にはほぼ出会うことがなかったので、サンプルに偏りこそありますが台湾の犬は本当に自由にそこかしこに寝転がっていて、日本との犬文化の違いに驚きました。また台湾に行くことがあれば次こそ証拠写真を撮りたいと思います。



↑いくら自由でもさすがにルールはあるらしい。糞は片付けましょう。片付けないと罰金というのは日本も導入してほしい瞬間がありますね。

台北と東京 インフラと鉄道とバイク

高坂 州

僕は今回の研修以前、台湾に行ったことがなかった。実際に現地に行ってみると、台湾に対して抱いていたイメージや想像が、ある面ではその通りであり、またある面ではまったくそうではなく、予想もしていなかったものと遭遇したりした。そこで、僕が台湾に対して抱いていたイメージと現実、そしてそれを踏まえた台湾と日本（どちらも全部を知っているわ

けはないのでここでは台北と東京)の独断と偏見に基づく3番勝負での比較により、どちらがより良い都市か決定する。

まずは台北で一番驚いたことから。もしかすると台北に着いて一番初めに気づいたことだから一番印象に残っているのかも知れないが、とにかく。**台北は、やたらバイクが多い。**まさか車よりもバイクが多いなんて、そして交差点にバイク専用の信号待ち区画が整備されているなんて、思わなかった。しかも乗ってる人はみんなマスクを付けている。黒いマスク、ピンク色のマスク、チェック柄のマスク。**なんなん。**いやバイクが多すぎる。細い細い道を歩いていても後ろからバイクが怒涛の勢いで通ってくるし、排ガスのおかげで空気は汚すぎるし、とんでもないところだな、と初めは思った。ただ3日目くらいには慣れた。

現地の大学生に聞いてみると、彼らは18歳になってバイクの免許が取れたらすぐバイクを手に入れるらしい。いろいろな場所に行ったり、**ドライブデート(?)**するのに必須らしい。なるほど、それはそうだ。地下鉄を使うと言っても限界がある(後述)。あとバイク運転するの楽しそう。

ちなみに東京はどうかというと、ご存知の通りバイクは少ない。たまに爆音を出しながら走ってたりするがそれくらいだ。台北、東京、バイク事情に関してどっちが良いか選べと言われたら僕はやっぱり東京を選ぶ。なにより空気が圧倒的にきれいだ。青梅街道沿いでもそう感じるから、台北はよっぽどなんだと思う。あと、チェック柄のマスク。僕のファッション感性はまだそのレベルまで到達していない。

ということで、**第一戦、「バイク(とマスク)」は東京の勝利！！**

次に台北で気になったのは地下鉄だ。台北には碁盤の目のように道が張り巡らされており、その道の下を通るように地下鉄が整備されている。さらに、路線と路線が交わる場所にちゃんと駅があるので乗り換えもしやすい。あと車両の扉が大きいので乗り降りしやすい(?)。と、ここまで台北地下鉄の良い点ばかりを並べたが、実際とても使いやすいと思う。乗車賃が東京よりかなり安く、さらに悠游卡(台湾版スイカ)を使うと運賃が2割引(だっただろうか)になり最大でも\$50(200円弱)ほどしか取られないのは素晴らしい制度である。こんなにも充実しているとは思もしなかった(事前リサーチ不足の露呈)。

では何が不満だったのか。2点。1:駅と駅が離れすぎていること、2:路線が完全に碁盤の目のようになっていること、である。これらが完全に個人的な不満であることはご容赦願いたい。1について、台北で僕らが泊まったホテル、国王大飯店は**二つの駅のちょうど真ん中に有った**。これを良く言えば、どちらの駅からでも行けて交通アクセスが良い()ということになるのだろうが、合計5日間宿泊しほぼ毎日地下鉄を使った身としてはもうちょっとホテルが駅に近ければ、と思っていた(地下鉄に対する不満ではなくなっていることは気にしてはいけない)。2について、これはもう完全に僕のミスなのだが、一度夕飯を食べた帰りに地下鉄の駅からホテルに向かって歩いていたら、いつまでたってもホテルに着かない。徒歩15分の道のりのはずだからもう着いても良いはずなのに、と思っていたら、地下鉄に乗っ

ていた時に通過した駅に着いてしまった。そう、駅からホテルと反対方向に歩いてしまったのである。原因は簡単、路線が左右対称で右と左を間違えたのだ。結果徒歩 15 分の道のりを 45 分かけて帰ることになった。こんなことがあっていいのか（いやよくない）（地下鉄なにも悪くないですごめんなさい）。

では東京の鉄道はどうなっているか。こちらもご存知の通り、JR・私鉄・東京メトロ etc が複雑に絡み合った路線図を形成しており、新宿駅「ダンジョン」などの魔境を生み出している。ただ路線網自体は乗り換えアプリを使えばそんなに苦労しないし、駅の構造も慣れればまあ何とかなる。ただ朝のラッシュ。これだけは許されない。台北の朝の地下鉄にも乗ったけれど、みんなバイクに乗って出勤しているのか、地下鉄の混雑自体は全くもって大したことではなかった。東京の朝の中央線のように、既に身動きが取れないほど混んだ電車に次々と人が押し寄せてきてカオスになることは台北では無かった。まあ単に台北の人口が東京ほどでないということもあるのかもしれないが、とにかく、台北の地下鉄と東京の列車網を比べたとき、確かに東京のほうが便利かもしれないが、僕は台北を選ぶだろう。

第二戦、「鉄道」、これは台北の勝利！！

最後に台北のインフラについて書く。インフラと言っても上で既に交通のことは書いてしまったので、ここでは電気、水道、そして通信について書きたい。結論から言うと、台北のそれらのインフラは普通に大丈夫だった。まず電気は台北にいる間一度も停電することではなかった。まあ当たり前といえば当たり前ののだが、昔アメリカに住んでいたときの「雷が一発落ちただけで市内全域停電」「木が倒れて停電した後 1 週間復旧しない」などと比べたら神レベルである。なのでこれはアメリカしか外国をまともに知らない僕にとっては衝撃的だった。次に水道。これは特筆することはない。生水を飲んではいけないというのは日本国外ではだいたいそうらしいので、台湾も例外に漏れず、ということだ。そういう場合ミネラルウォーター等を購入することになるが、泊まったホテルでは水のボトルを無料でもらえたり、コンビニでも 2L の水を \$25 (80 円くらい?) で買えたので問題なかった。そして通信に関しては、現地では支給された HUAWEI 社の WiFi ルーターを使っていたのだが、通信速度、電波強度共に無問題であった。

では何も問題はなかったのかということと正確にはそうではない。とはいえこれがインフラと関係あるのかと問われれば「多分無い」というのが僕の答えになってしまうが。2 日目の夜ホテルに帰ったらエアコンが壊れて天井から水が僕のスーツケースに降りそそいでいたのを発見してしまったということがある。スーツケースを閉じていたから事なきを得たが、発見したときは、驚きを通り越して爆笑してしまった。結局とりあえずなんとかしたので問題は無い。水道の水に関しては飲まないようにしていたので何もない。通信、これはルーターに接続できれば当然問題ないのだが、そもそもルーターの電池がなくなったり(とても減りが早い)、電池があっても繋がらなかったりするなどのトラブルが多発した。現地の通信業者のプリペイド sim を使ったらどうなるのか確かめたいが、それは次回以降のお楽しみである。

ちなみに東京はといえば、もうこれは語るまでもないだろう。滅多なことでは止まらない電気、飲める水道水、そして高速通信・WiFi…。世界中を見渡してもここまで高いレベルに到達している都市はあまりないのではないかと(推測)。ただ、台北もこの先の経済発展の様子によっては東京に追いつくかもしれない、ということは記しておこう。

最終第三戦、「インフラ(電気、水道、通信)」は東京の勝利！！！！

最終結果は、**2勝1敗で東京の勝利**となった。始めはこんなに熱い戦いになるとは思わなかったのでびっくりだ。発展中とはいえ、台北はその高いポテンシャルを垣間見せてくれた。台北、ひいては台湾の今後に期待したい。実際、台湾は割と素晴らしい場所だった。気候、食べ物、物価と、台湾に移住しようかと思うほど良いものが揃っていた(個人の感想です)。

今回の台湾研修では自由時間が多く、そのため自分たちで台湾の街を探索する時間が十分にあった。そこで得られた発見には、単に旅行で台湾(台北)を訪れただけでは得られなかったものもあるに違いない。この貴重な機会を提供してくださった東京大学、8日間の日程中随所にそのコミュ力の高さを発揮しつつ引率してくださった阿古先生、そして行程を共にしてくれた同學們的皆には深い感謝の意を示したい。

報告書 エッセイ編

鈴木 隆斗

今回の研修では準備不足が悔やまれたことが1つある。学生の交流で台湾の学生が日本のドラマやアニメが好きと言っていた。「ガキーン(ガッキーこと新垣結衣のこと), very cute!(笑)」と言っていた。そこまでは想定範囲内である。しかし、その後こう聞かれたのだ。「私たちは日本を知っている。あなたたちは台湾のことを何か知っているかい？」私は言葉に詰まってしまった。何も知らなかったのである。日本で台湾ドラマが流行っているわけではないので知らないのは無理もない。とはいえ、この時に何か知識を披露できるくらいには台湾を知っておけばよかったと反省した。台湾のドラマ等は私の次までの課題だ。



左の写真は嘉義で偶然出くわしたロケ。お姉さんの前に、ベンツに乗ったおじさんが現れるシーン。監督らしき赤髪の女性が何か言っているようだが

そのような後悔はさておき、台

湾研修ではよく遊び、よく学んだ。日程に組まれた学生交流や見学は報告書にある通り、有意義に過ごせたと考えている。が、自由時間も有効活用したことをここで強調しておこう。カタコトとはいえ中国語を使ったり、街を歩いて台湾の雰囲気を楽しんだりした。博物館や夜市も堪能した。印象に残ったものの一部を紹介しよう。

「台湾の果物は安くて美味しい」これは事実だと思う。嘉義に着いた日の夜、私は友人たちと果物を買いに夜市に向かった。果物パーティーを開くためである。実際に夜市の果物は安く、日本では滅多に見かけない知らない果物がたくさん売られていた。この写真もその一例。黄色いのは何なのか。店員に友人が尋ねた。「这个是什么？甜吗？（これ何？甘いのか？）」聞き取れない部分もあったが、とりあえず甘いと言う単語を聞いて試しに買ってみたのだ。また、南国の果物アテモヤを買った。これは台湾初日に非常に美味しいことが判明していた。



他にも幾つか買ってホテルに戻り、パーティーにした。だが、そこで問題発生。例の

謎の黄色い物体、確かに甘かった。甘いは甘いのだが、カボチャ的甘さだったのだ！果物パーティーにふさわしくないで口直しにアテモヤに飛びついた。が、アテモヤは熟れていなかった。熟れていないので美味しくないし、泣きっ面に蜂のような有様だった。他の果物はメロンなどでこれらは普通に美味しかったが、残念な気持ちは残った。

店員の説明が聞き取れていれば。どれが熟れているのか聞ければ。いくらでも後悔の種は尽きない。まとめればこうだ。中国語をもっと勉強していれば・・・。

台湾研修で中国語を使う機会に恵まれた。さらに中国語をブラッシュアップしたいとも思うことができた。台湾研修は楽しむことができ、学ぶこともできた美味しい研修であったと思う。

台湾にて

村上 泰仁

今回の研修で台湾へ実際に行ってみて、まず初めに感じたのは思っていた以上に台湾の街の様子が日本のそれに近かったということで、訪れた場所のいくつかに既視感を覚えた。街

にはすぐ慣れ、夜市などを気軽に見て回ることができた。夜市ではたくさんの珍しいものが売られており、特にフルーツや野菜類の真新しさと安さが特に記憶に残っている。そうはいってもやはり異国、慣れないこともやはりあった。特に右側通行には苦戦させられた。車はいないなと道を渡り始めて後ろから車が来るのは恐怖である。

研修では、現地に住んでおられる方々や歴史的な事件を経験された方のお話を聞いて、台湾の歴史をかなり知ることができた。正直に言うと今まで自分は、台湾は中国の一部で、なぜか中国のなかでは親日の人が多いところというイメージを持っていたが、実際は大戦後の大陸からきた中国の政府に反対するという文脈で「昔」である日本の統治時代のほうがよかった（まだマンだった）という程度の「親日」であったことが実感された。ありきたりではあるけれど、この台湾研修は実際に行ってみなくてはわからないことがあるということが肌身に感じられた経験になったと思っている。

研修全体を通じて

森 隆太郎

初めて台湾で過ごした8日間はとても濃い時間だった。3つの点に分けて全体を通じて特によく感じたことを書こうと思う。

1、台湾という場の良さ

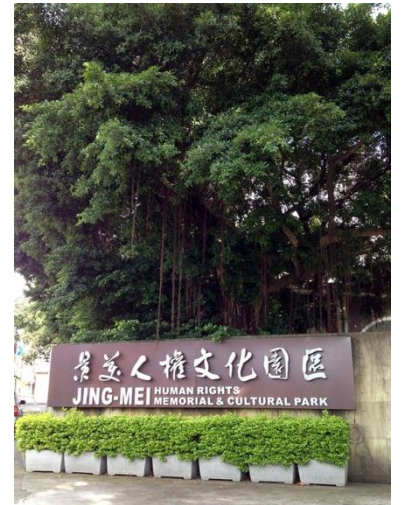
独特な香辛料の匂いが漂い中国語や日本語が飛び交う夜市、手書きの看板が掲げられた小さな映画館、びっくりするほど安いMRT、これまた驚くほど安い牡蠣のオムレツ（蚵仔煎）、甘ったるいペットボトルのお茶、とにかく苦くてまずい檳榔、赤提灯の並ぶ九份の狭い街、敷地が広大でうまくて安い学食もある台湾大学、、台湾での8日間で触れた多くの場所、もの、雰囲気がとても新鮮でかつ僕の気に入るものだった。率直に、旅行先として、時間を過ごす場所として、台湾が好きだなと感じられた研修だった。

一方で、いつか夜市で注文をした時、中国語が使えず英語も通じず曖昧な意思疎通で流してしまい、「日本からの観光客と台湾のお店の人」という離れた立ち位置をお互いにとても意識したように感じられた瞬間があった。中国語を話すことで、相手の話を理解できるようになることで、ここの良さや本当の雰囲気をもっと感じられるようになるのだろうと当たり前のことを思い、少し悲しかった。また必ず、台湾に行きたいと思う。



2、 台湾のアイデンティティー

台湾大学で徐先生がおっしゃっていた「歴史アイデンティティーと政治アイデンティティーは区別してあるべき」という言葉が印象に残った。徐先生の場合は、中国に管轄されたくないという意味で台湾人としての政治アイデンティティーを持ちながらも自分は客家の出身であるという歴史アイデンティティーもしかと持っているとおっしゃっていた（僕には理解しきれていない部分も大いにあると思うが）。アイデンティティーの置かれる範囲は複数あり得るということ、また、変えられない（変える必要のない）歴史と現在の政治的主張を区別するという。この二点がその根っこにあると思われる徐先生の複雑で柔軟な立ち位置から学べることは多いと思う。



3、 目に見えるものの裏にあること

今回の研修の特徴は、多くの場所で、そこをよく知っている方々からお話を聞いたことだと思う。そこを訪れた人が実際に目にするものは皆同じでも、それが意味するところはその人がどれだけの歴史や文脈を知っているかで大きく変わってくる。そう考えると、何を考えられるかは多くの部分で、何を知っているかの上にあると思う。台湾の複雑な歴史と今を学ぶことで、台湾の人々が意外なほどよく日本語を話せるという事実から単なる「親日国」という評価を超えた意味や背景が見えてくる。故宮博物館の目玉の一つが“白菜”だと事前に知ること、小さく綺麗な翠玉の彫刻がそれ以上の価値を持った宝に見えてくる。知ることと考えること、そして多くの人知れるように解明すること。この3つは切り離せないことなんだ、というある種当たり前のことを改めて強く感じた研修だった。

終わりに、8日間引率して下さった阿古先生、比留根さんや黒羽先生を始め台湾を案内して下さった方々、この研修を支援して下さった方々、貴重な機会を設けてくださり、本当にありがとうございました。

景美人権園區をめぐる

安藤 実大

今回の台湾研修の中で、台湾の闇とも言える時代を最も強烈に実感したのが、三日に訪問した景美人権園區でした（右図 <http://twoffice.exblog.jp/18509132/>）。228記念館でも学びましたが、戦後共産党と対立し台湾に逃れてきた国民党は、元からいた台湾人を軽視し、一般市民が作ったサトウキビなどの物資を平気で横奪して国共内戦のための資金にするとい

うようなことを繰り返し、また政治の腐敗もひどかったようです。こんな国民党に対して不満が生じるのは当たり前ですが、国民党は政治的な言論の自由を認めず、たくさんの市民がここ景美人権園區で政治犯として裁判にかけられ、多くが命を落としました。この裁判について特筆に値するのは、それが軍法裁判で会ったことです。日本国憲法では軍法裁判にかけられるのは現役軍人のみと定められていますから、当時の国民党の統治機構がいかにずさんなものであったかがわかります。戦後アメリカの統治下で軍部が解体され法治国家として復興に邁進していった日本と違い、台湾では戦争が終わっても、戦中のような抑圧的で無法な支配が連綿と続いてしまっていたことが伺えると思います。

さて、景美人権園區に残された法廷、収容所などの数々は、当時の重々しい雰囲気が伝わってくる、とてもリアルなものばかりでした。中でも印象的だったのが面会室です。面会者とガラス越しに電話で話すことができる構造なのですが、受刑者とその家族がここで悲しみあっていた場面を想像すると、非常に胸が痛むのと同時に、不当な罪で人々を投獄した国民党に対して怒りがこみ上げてきました。後で調べてわかったことなのですが、受刑者とその面会者が電話を通して話したのは、会話の内容を傍受して「不適當」と判断される話が出てきたら面会を中断させるためだったそうです。上からの圧力ゆえに自分の思いを表現することが許されず、ただ衣服の洗濯などの刑務を行なわされて過ごす日々は、この上なく憂鬱であつたろうと思います。

自分がもしこの受刑者の立場にあつたらと想像すると、あまりに自由を束縛された生活に耐えられなくなり、数年で自殺してしまそうな気がします。人権園區には投獄された方やなくなった方一人一人の名前を書いた記念碑がありましたが、ガイドさんによると、実際処刑ではなく収容所内で自殺して亡くなられた方も多いそうです。

今回、1980年代に収容所に投獄され1990年代まで所内で医師として働かされていた陳中統さんがガイドをしてくださいましたが、快活でユーモアのある素敵な方で、過去の辛い経験を当時の同期と軽く笑い飛ばしてしまっているようなその姿に感服いたしました。刑期を終えてもなおここに残って当時の様子を伝える活動を続けていらっしゃる陳さんに恥じぬよう、台湾の暗い過去もしっかり自分の胸に刻んでおこうと思いました。



台湾の言葉と大陸の言葉

小森 優真

私達は一年間普通話を習ってきた。台湾で話されている言葉も基本的には普通話と同じだと聞いていたが、実際に現地で話されている言葉は普通話と色々と異なる点が多かった。まず一目でわかるのは漢字だろう。大陸では簡体字を使い、台湾では繁体字を使う。どちらかというと繁体字の方が日本の漢字に近かったように感じられたが、勿論違う字の方が多く、自分の知っている漢字と対応させるのが大変であった。

さらに台湾の言葉と普通話は少し発音が違う。台湾ではほとんど舌を巻かずに発音していたのだ。例えば、是は普通話では shi という発音で舌を巻くが、台湾では舌を巻かずに四 (si) とほぼ同じ発音になる。台湾に着いてしばらくはそれが全く分かっていなかったのだから聞き取るのに非常に苦労した。同行していた友人曰く、舌を反らせて話していたら全く通じていなかったのに、舌を反らさなくなった途端にちゃんと通じるようになったという話であった。

また、七日目に訪れた文学館で面白いものを見つけた。児童コーナーに書かれた漢字の隣に不思議な記号が書いてあったのである。日本語の読み仮名にあたるものをこのように特別な書き方をするのかと思って尋ね



たところ、どうやらピンインとは異なる台湾での発音記号らしい。注音（ボポモフォ）というものであった。ピンインがアルファベットを用いた発音記号であるのに対し、注音は独自の記号を用いている。台湾側からすれば、こちらの方がより正しい発音を表しているとのことだそう。文字のみならずその読みを表す発音記号まで大陸と違うというのは興味深かった。



さらに、地名の表記も面白いことになっていた。例えば、淡水という地区があったのだが、大陸のピンインで表記すれば Danshui となるのだが、実際の表記は Tamsui となっていた（写真ではわかりづらいかもしれないが）。どうやらウェード式と呼ばれる表記方法を取っているようだ。このようにウェード式で書かれた地名は一部で、多くの地名はピンインで書かれている。昔から使われてきたものは未だにウェード式で書かれているらしい。ピンインに統一した方がいいのではという意見もあるが、政治的な問題が大きいのだろう。

このように、同じ中国語圏でありながら、歴史や政治の問題によって大陸と台湾で言語の様式が少し異なるということがわかり、非常に面白かった。日本統治時代は日本語教育が行

われていたことも考えると、台湾の言語事情は非常に複雑で興味深いものである。外国語を学ぶと新たな視点ができるとよく言われるが、こうしてみると言語の違いと視点の違いは関連しているということが実感できる。

台湾の文化～日本・中国との差異～

橋本 淳平

台湾は日本とも中国とも共通点が多い。例えば、ホテルではたいてい日本語が通じるし、ホテルの近くの三越デパートには富士そばや寿司屋や丸亀製麺が軒を連ねていた。中国に関しては、同じ中国語を使い、漢人系の人が多数を占めるなど、枚挙にいとまがない。それだけに、微妙な相違点に目がいくというものだ。

日本との違いを言えば、箸がある。どちらも主に木製の箸を使って食べる場所は共通しているが、日本では箸を横に置くのに対し、台湾では縦に置く。また、日本の箸は先端が尖っているのに対し、台湾のものはほとんど尖っていない。これについては、奇しくも研修三日目、台湾大学の徐興慶教授の講義で由来を知ることとなった。

一説では、日本に箸が伝来したのは隋代と言われている。遣隋使が中国の食法と一緒に箸を持ち帰ったということだ。つまり、この時点では中国でも箸を横向きにおいていたということになる。転機が訪れたのは、日本が遣唐使を廃止し、国風文化に花を咲かせた数世紀後の宋代だ。世界的に寒冷化と食糧不足が起こったこの時期に、中国では箸を縦に置くようになったという。というのも、円卓を囲む形で食事をする中国では、箸を縦に置いた方が人より速く大皿の上の料理をとることができるからだとか。あくまで一説ではあるが、当時の人々が奪い合うように食事をとっていた様子がうかがえる。台湾が箸の文化を中国から取り入れたのがこれより後の時代なので、台湾では箸は縦置きなのだ。

では、なぜ日本や唐代までの中国では箸は横置きなのだろうか。これについても、徐教授が説明してくれた。一つには、対面で食事をする際に尖ったものを相手に向けるのが失礼だからだ。これにはなるほどと頷いた。(これは筆者の勝手な想像だが、台湾の箸の先端が尖っていないのにも同様の配慮があるのではないか。)そしてもう一つ、これは日本特有の理由だ。日本ではアニミズムが信仰され、万物に神仏が宿るとされている。つまり、食べ物となった生き物にも神が宿ると考えられる。その延長で、橋に音を通じる箸は、神様のおわす彼岸と此岸の境界としての意味を持つようになったとか。食べる前にいただきますと言うのも、動植物への感謝を込めたアニミズム的習慣だとおっしゃっていた。まさか台湾に来て日本のことを教わるとは思っていなかったが、台湾の学生と交流した際には、日本について知っておくことも重要だと感じるようになった。

次に、中国との差異についての発見を書きたい。日本の中華料理店でも見るが、中国では

よく家の壁に福の字が逆さにして貼ってある。これは倒福といい、授業で扱ったこともあり、割と馴染みのある習慣だ。しかし、台湾では逆さになっていないものの方が多かった気がする。なぜ台湾で逆さにしないのかは残念ながらわからなかったが、倒福の所以について調べてみると面白い伝承が見つかったため、簡単にまとめる。

ある春節の日、洪武帝が市井を散策していると一枚の年画を見つけた。女性が西瓜を抱えているという豊作を願う絵だったが、女性が纏足をしていなかったのが洪武帝の逆鱗に触れた。懷西（西瓜を抱える）と淮西が音通することから、淮西出身の馬皇后（洪武帝の妻）が民間の出身で品位に欠けると嘲笑するものだととらえた洪武帝は、年画の作者を突き止めて処刑するため、官吏に命令して年画について調べさせ、無関係な家には福の字を書いた紙を貼らせた。このことを知った馬皇后は無辜の民に同情し、全ての家に福の字を貼るように言った。しかしその中の一軒が字を読めないために福の字を逆さまに貼ってしまった。洪武帝はこれを民衆の生活が困窮していることに対する皮肉だと解釈してその家を処罰しようとした。そこで機転を利かせた馬皇后が、倒（逆さ）が到に音通し、福が至ることを表すために故意に逆さにしたのだと主張して洪武帝を説得した。それ以降、民衆を守った馬皇后を称え、倒福の週間が始まったとされる。

台湾という異文化に触れて思ったことは、文化にはそれぞれの理由があるということ、そして、その所以を知ることは面白いということだ。日本という単一化の進んだ社会にいては気にも留めないようなことを疑問に思えるのは、海外研修の醍醐味と言えるかもしれない。

台湾研修：自由エッセイ

小林 真也

私は今回の研修で台湾を訪れる際、できるだけ現地の人々と同じ生活をし、台湾人の感覚から日本・台湾両国の比較および考察をするという目標を立てた。たった一週間程度の滞在であり、かつ宿泊場所は日本人向けの高級ホテルであったから、台湾の生活全てを知ることができたとは考えていない。しかし、そのような限られた自由時間の中でも、研修に出発する前に人から聞いて抱いていた台湾の印象と、自分で実際に体験した現実との間には、差異、もしくは微妙な温度差があった。今回の自由エッセイでは、その差異のうちの一つを取り上げて考察する。

「台湾は物価が安い」

これは、日本と比べれば正しいと思う。うまく店を選べば、食べる量がかなり多い私でも一回の食事が100円以内に収まるし、屋台で売っている土産物の価格帯も、日本の観光地におけるそれよりはるかに安かった。しかし、台湾人にとってはどうだろうか。調べてみる

と、一世帯あたりの年間所得は、台湾全体で 2010 年に 615,016 元（約 2,275,559 円、1 台湾元＝3.7 円（以下同じ）として計算）ⁱという値を得た。他の統計では、2010 年に 515,256 元（約 1,906,447 円）ⁱⁱという値もあった。一人あたりでは、統計等の源典に当たることができなかったのだが、インターネット上の記事等を参照する限り、おおよそ 180 万円という値が多く見られた。日本と比較してみると、2015 年の一人あたりの平均給与が約 420 万円ⁱⁱⁱというから、かなりざっくりとした言い方だが、台湾の平均年収は日本の半分程度だと言える。そう考えてみると、台湾の物価を現地人の感覚で捉えるには、日本円換算した後さらに 2 倍して、日本の物価と比較するのが妥当ではないだろうか。そうすると、冒頭にあげた私の食事の価格も、100 元＝約 370 円でさらに 2 倍して、740 円程度。日本人大学生の感覚で、一食が 740 円という、毎日食べたくなるほど安い価格とは言えないだろう。

食事以外でも、上記の視点から見ると台北市内はそれほど物価が安いとは思わなかった。タクシーの初乗りは 75 元、これを 3.7 倍して円換算し、さらに 2 倍してみると、555 円に相当する。東京では初乗りが 410 円だから、感覚的にはむしろ東京より高いと言ってもよいくらいだろう。他にも、日本では「100 均」と呼ばれ、安さの代名詞のような扱いを受けるダイソーは、台北市では 39 元均一であり、その他のローカルな商店と比較しても安いという印象は受けない。

私がここまで物価にこだわるのには理由がある。研修中、台湾人の大学生と話していた時、ある日本人学生が何気なく発した「台湾は物が安いからいい」という言葉に、彼女の顔が一瞬曇ったことがきっかけだった。気になったので彼女と話してみると、「自分は別にそれほど物が安いとは思わないし、収入も日本と違うから、日本人にとって安く感じるだけだ。ここ台北はむしろ物が高いよ」という答えが返ってきた。私の中国語能力の制約のためこれ以上詳しいことは聞けなかったものの、両国の経済規模の違いに触れぬまま、自国の感覚だけで物価の高低を判断することは、旅行者や留学生にとっては何も問題ないのだが、それだけでは現地の人々の生活の様子はつかみきれないだろう。

今回は物価およびその感覚の比較をテーマとしたが、今回と同様に一度日本人の基準から脱してみることは、二国間を比較するうえで重要な視点になると考える。特に、文化や感覚など数値化できないものについては、自国の視点と相手国の視点、両者が揃って初めて議論の俎上に載せることが許されると考える。そのことを、今回の研修で身をもって実感できた。

ⁱ 2012 台湾の経済 DATA BOOK（公益財団法人交流協会）99 頁
[https://www.koryu.or.jp/ez3_contents.nsf/15aef977a6d6761f49256de4002084ae/147d413a66547dff49257b160022d9c3/\\$FILE/2012databook.pdf](https://www.koryu.or.jp/ez3_contents.nsf/15aef977a6d6761f49256de4002084ae/147d413a66547dff49257b160022d9c3/$FILE/2012databook.pdf)

ⁱⁱ 台湾の労働市場と社会保障制度（東京大学社会科学研究所）図表 7-3-4
http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/gov/research/asia_ch7_taiwan.pdf

ⁱⁱⁱ 平成 27 年分 民間給与実態統計調査 調査結果報告（国税庁）
<http://www.nta.go.jp/kohyo/tokei/kokuzeicho/minkan2015/pdf/001.pdf>